

# 幻聴妄想かるたを用いた統合失調症のイメージ調査

## Image survey of schizophrenia with use of Delusion and Hallucination Cards

櫻井 信人\*  
Michito SAKURAI

溝畑 剣城\*  
Kenjo MIZOHATA

西本 美和\*\*  
Miwa NISHIMOTO

### Abstract

The study aims to clarify how the image of schizophrenia can be changed by delivering a lecture with use of Delusion and Hallucination Cards. We asked 91 second-year nursing students to play Delusion and Hallucination Cards and conducted a questionnaire survey on the image of schizophrenia before/after playing the cards. We were using the questionnaire contents consisting of psychiatric patient's image survey, social distance scale, and free writing. Later, the results were analyzed by using Wilcoxon signed-rank test, Mann-Whitney U test, and factor analysis with SPSS25.0J for Windows (Significance level: less than 5%). For free writing, we extracted the portion of image and teaching effect.

As a result, the study received answers from 78 respondents, and 74 respondents provided valid responses for the analysis. A shift in the image of schizophrenia by playing Delusion and Hallucination Cards indicated a significant change in 18 items such as "Intense-Calm", "Dangerous-Safe", and "Scary-Not scary", then the image of schizophrenia was shifted to positive by playing Delusion and Hallucination Cards. In social distance scale, we found a significant change in "Whether to employ a person with schizophrenia if you are a manager?", but there was no large change in other items. In free writing, 4 categories were extracted as "Understanding of symptom", "Understanding of individuality", "Change in image", and "Enjoyment through learning Delusion and Hallucination Cards", and positive answers occupied the majority.

Since the image of schizophrenia was shifted to positive by using Delusion and Hallucination Cards but change in social distance scale was not recognized, we would like to further examine lecture contents in future such as actual experience of a person with schizophrenia who could successfully returned to society.

キーワード：統合失調症 イメージ 幻聴妄想かるた 看護学生 教育

---

\* 関西国際大学保健医療学部

\*\* 奈良学園大学保健医療学部

## 1 はじめに

平成23年に厚生労働省は、従来の4大疾病であるがん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病に、新たに精神疾患を加え、5大疾病とした。平成26年の患者調査<sup>1)</sup>によると、精神疾患で医療機関にかかっている患者数は392万人と推計されており、その内訳は、気分障害が111万人、統合失調症が77万人、神経症性障害が72万人となっている。患者数としてみると最も多いのは気分障害であるが、これを入院患者で見ると最も多いのは統合失調症の16万人であり、気分障害で入院している患者は3万人に満たない。統合失調症は精神科病棟で出会う最も多い疾患であり、他科において出会う機会も含めて、看護師は正しい知識を得ておく必要があるといえる。

現在の日本の医療における課題として、在院日数の短縮や地域移行が挙げられている。精神科においても同様であり、長期入院患者や社会的入院患者の地域移行が取り組まれている。統合失調症患者が地域で生活するためには、支援体制の充実も必要であるが、それだけでなく地域の理解も重要である。統合失調症の発症率は1%と言われており、誰もが発症する可能性のあるありふれた疾患である。しかし、統合失調症をはじめ精神障害者に対して市民が抱くイメージは、否定的なイメージが多く、そのイメージはマスメディアによる影響も大きい<sup>2)3)4)</sup>。統合失調症をはじめとして、こころの問題に対する社会の認知度はまだまだ低いのが現状である。これは精神看護学を初めて学ぶ看護学生においても同様であると思われる。精神障害者へのイメージは精神障害者に対する看護援助に大きく影響することから<sup>5)</sup>、実習前の講義の段階から精神疾患に対する正しい知識や看護援助に加え、正しいイメージを習得できるような授業展開が必要となる。

研究者らは精神看護学教員として、日々講義や実習を行なっているが、精神疾患は検査値や画像データで示される内容は少なく、他領域と異なり幻覚や妄想など目に見えない部分が多い。学生は1・2年次に講義を通して精神の疾患や看護などの勉強をしているが、学生の多くは統合失調症の人に関わった経験がなく、なかなかイメージが付きにくい状況である。一方、3年次の精神看護学実習で病院へ行き、患者を受け持ち関わることで精神疾患のイメージの変化や理解が深まることは、学生のレポートやカンファレンス等で実感を得ている。実際に、実習を通しての看護学生の精神障害者に対するイメージの変化に関する研究は多く見られ<sup>3)6)7)8)9)</sup>、いずれも肯定的なイメージの変化が見られていた。

精神障害者と関わる事がなく知識だけがが増えていく講義の段階では、スティグマは固定化することなく流動的と言われており<sup>10)</sup>、実習前の講義の段階でいかに正しいイメージを抱かせ、精神障害者に対する理解を深めるかが課題となっており、これまで研究者間で教育内容の検討を行ってきた。そのような中で、精神障害者が作成した幻聴妄想かるたの存在を知り、授業で使用するようになった。幻聴妄想かるたとは、その名の通り精神障害者が体験している幻聴や妄想の内容が反映されており、精神症状や当事者の心情などのイメージが期待できるものである。かるたという遊びを通して統合失調症の主症状である幻覚妄想の症状を知り、怖さなどのマイナスイメージを緩和し、身近に感じるなどのイメージの変化ができるのではないかと考えた。そこで今回、精神疾患の患者が作成した幻聴妄想かるたを授業で用いることにより、統合失調症へのイメージがどのように変化するかを、アンケート調査を用いて明らかにすることを目的として本研究の計画に至った。看護学生にとってイメージすることが難しい統合失調症の症状について、実習前

の講義の段階でかるたを通して学び、イメージを肯定的なものに変化させることは、今後の精神看護学の教育や実習指導に有用であり、教育に寄与するものであると考えている。

## II 研究目的

本研究の目的は、幻聴妄想かるたを用いた講義を展開することにより、学生の統合失調症に対するイメージがどのように変化するかを明らかにし、教育内容を検討することである。

## III 研究方法

### 1. 研究デザイン

質問紙調査を用いた量的記述的研究とした。

### 2. 対象者

本研究の対象者は、A県内の看護学生で精神看護学の講義を受講する2年生91名とした。対象者は3年次の精神看護学実習をまだ経験していない学生であり、1年次の疾病治療論（精神）、2年前期の精神健康看護学概論を履修し、後期の精神看護援助論を履修中の学生である。

### 3. 調査期間

データ収集期間は2017年1月とした。

### 4. データ収集方法、調査内容

看護学生91名を対象に幻聴妄想かるたを実施し、その前後で統合失調症のイメージに関するアンケート調査を行なった。

幻聴妄想かるたは、就労継続支援B型事業所ハーモニーの利用者が自身の体験を基に絵を描き文章を作成したものであり、医学書院から2011年11月に出版された。(ISBN978-4-260-01485-4)かるたにはDVDが付属しており、かるたの作成過程や作成した人たちのインタビューが45分収録されている。

幻聴妄想かるたは精神看護援助論の講義の中で展開した。精神看護援助論は全30回の講義であり、統合失調症をはじめとした精神疾患患者への治療や具体的なケア、リスクマネジメント、退院支援や地域移行、ペーパーペイシエントを用いた看護課程の展開を終えた第25回目に実施した。なお、学生数が91名と多いことから、かるたの実施など内容を考慮したうえで、2つのグループに分け実施することにした。90分の授業の構成としては、事前アンケートを実施後に、幻聴妄想かるたを説明し、幻聴妄想かるたを実施した。この時は一つ一つ絵札を見て、教員の説明を入れながら学生に解釈を促した。その後DVDの視聴をして再度かるたを実施し、事後アンケートの回答をしてもらい終了とした。

質問紙（資料1）は、星越らの「精神障害者に対する看護学生の社会的態度」の精神病イメージ調査<sup>11)</sup>、Truteらの社会的距離尺度、研究者らで作成した自由記載から構成されたものを使用

した。依頼書1枚、質問紙2枚の計3枚で構成し、回答は5分程度で可能なものとした。

精神病イメージ調査は、SD法を用い、「無知な」－「知的な」、「縁遠い」－「身近な」など24項目の形容詞対からなる項目について「どちらでもない」を中心に、左右両極に向かって「やや」、「かなり」、「非常に」の7段階の評定で求めた。なお、本研究では精神病を統合失調症に置き換え使用した。

社会的距離尺度は、精神科に入院歴のある統合失調症のAさんの社会復帰に向けた事例をもとに、「あなたと同じ地区にAさんらの社会施設ができるとしたらどうしますか」、「あなたの家に空き部屋があるとしたらAさんに貸してあげますか。」など、8項目を賛成から反対までの4段階で求めた。

自由記載は、幻聴妄想かるたを通しての感想や学び、精神障害者、統合失調症のイメージについて思うことなど自由に書いてもらった。

## 5. 分析方法

得られた結果はSPSS25.0J for Windowsを用いて、ウィルコクソンの符号付順位検定、マンホイットニーのU検定、因子分析を行い、幻聴妄想かるたを実施したことによる統合失調症のイメージの変化を明らかにした（有意水準は5%未満）。自由記載については、イメージや授業効果に関する部分を抽出し、意味内容に準じてまとめた。

## 6. 倫理的配慮

本研究は関西国際大学倫理委員会の承認を得た上で実施した。本研究はアンケート調査であり、精神看護援助論の講義を受ける2年生を対象としている。アンケートは、幻聴妄想かるた実施の前後2回に分けて回答してもらった。前後の変化を比較するために回答者を特定する必要があるが、氏名の記載は避け、番号やマーク等を記載してもらった形とした。

アンケートの実施にあたっては、研究データ及び結果は研究目的以外に使用することはないこと、回答は任意であること、途中で中断することは可能であること、本アンケートは成績とはまったく関係ないこと、回答しない場合も影響はないことを口頭で説明し、アンケートにも説明を記載した。なお、研究参加への同意はアンケートの回収をもって同意とした。

得られたデータは、厳重に管理し、研究終了後にアンケート用紙は全てシュレッダーで破棄し、データも消去することを説明した。

## IV 結果

回収78名（86.6%）、その内8割以上の回答があるもの74名を分析対象とした。性別は男性16名、女性58名であった。アンケート実施前の段階で精神疾患を持った人と関わった経験のある者は、とてもあると回答した者3名、少しあると回答した者17名であった。

### 1. 精神疾患を持った人と関わった経験によるイメージの違い

幻聴妄想かるた実施前のアンケートの段階で、精神疾患を持った人と関わった経験が「とてもあ

る」と「少しある」と回答した者と、「あまりない」、「全くない」と回答した者の2群に分け、マンホイットニーのU検定を実施しイメージの違いを比較した。その結果、統合失調症のイメージに関する質問24項目中、「程遠いー身近な」と「予測できないー予測できる」の2項目でのみ有意差が認められ、精神疾患を持った人と関わった経験のある者の方が、統合失調症に対して身近なイメージを持っていた。一方で予測できないというイメージは、精神疾患を持った人と関わった経験のある者の方が高かった。

## 2. 幻聴妄想かるた実施による統合失調症のイメージの変化

統合失調症のイメージの変化を、幻聴妄想かるた実施前後で比較した結果、「程遠いー身近な」、「不活発なー活動的な」、「予測できないー予測できる」、「わからないーわかる」、「はげしいーおだやかな」、「冷たいー暖かい」、「きたないーきれいな」、「危険なー安全な」、「悪いーよい」、「暗いー明るい」、「さびしいーにぎやかな」、「憎らしいーかわいらしい」、「陰気なー陽気な」、「かたいーやわらかい」、「複雑なー単純な」、「迷惑なー迷惑でない」、「困難なー容易な」、「こわいーこわくない」の18項目で有意な変化が見られ、幻聴妄想かるた実施により、統合失調症のイメージが肯定的に変化していた（表1、図1）。

表1. 統合失調症のイメージの変化

イメージ項目	Z 値	漸近有意確率 (両側)
無知なー知的な	-1.671	.095
程遠いー身近な	-4.180	.000
不活発なー活動的な	-2.929	.003
予測できないー予測できる	-3.426	.001
弱いー強い	-1.210	.226
遅いー早い	-0.816	.414
わからないーわかる	-2.736	.006
はげしいーおだやかな	-3.392	.001
冷たいー暖かい	-3.063	.002
きたないーきれいな	-2.117	.034
危険なー安全な	-4.823	.000
役立たないー役立つ	-1.230	.219
悪いーよい	-2.132	.033
暗いー明るい	-3.651	.000
さびしいーにぎやかな	-3.807	.000
間違ったー正しい	-1.460	.144
憎らしいーかわいらしい	-2.041	.041
陰気なー陽気な	-4.025	.000
かたいーやわらかい	-3.204	.001
浅いー深い	-1.013	.311
複雑なー単純な	-3.354	.001
迷惑なー迷惑でない	-3.834	.000
困難なー容易な	-4.127	.000
こわいーこわくない	-4.278	.000

Wilcoxon の符号付順位和検定

統計学的有意差は5%未満とした。

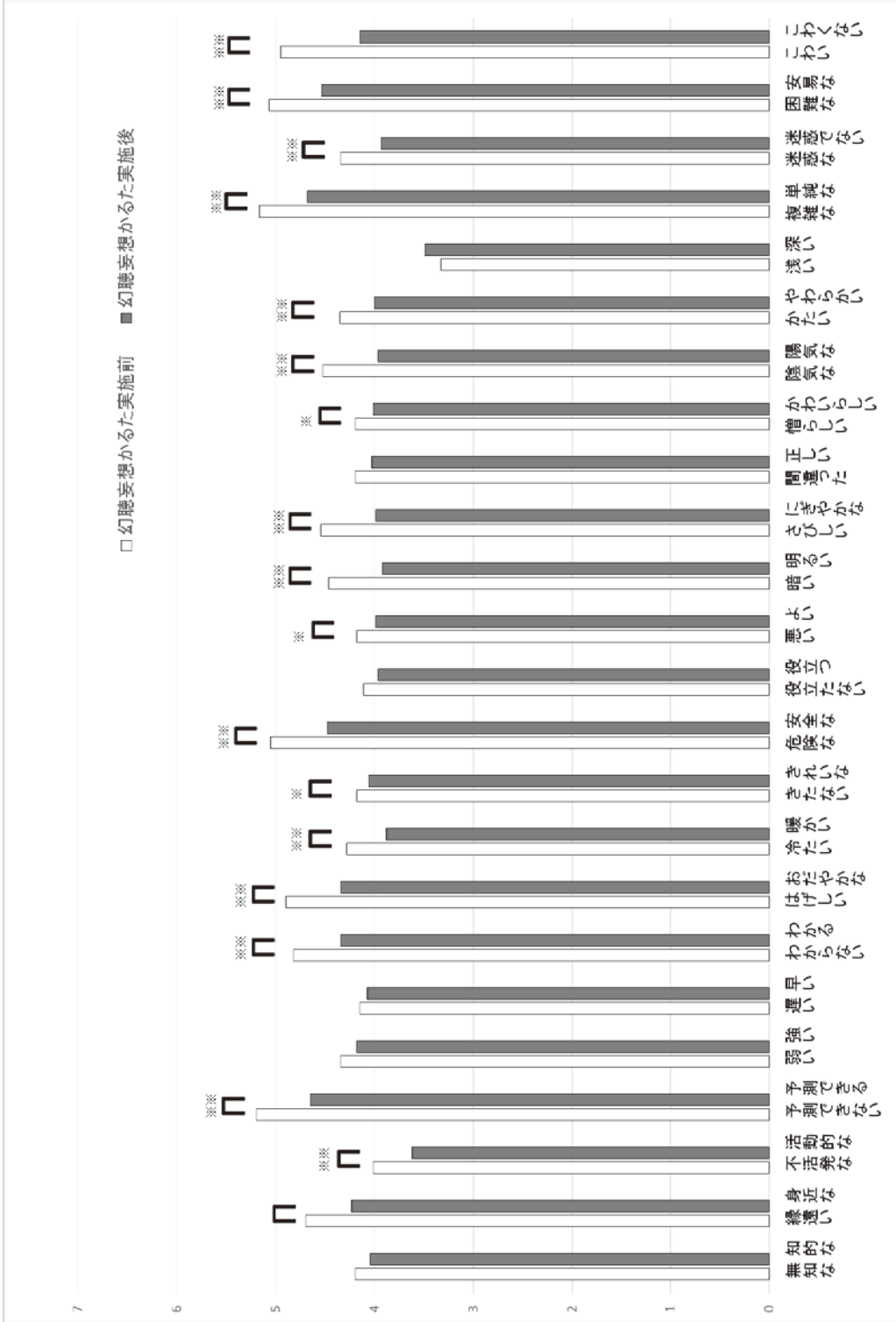


図1. 統合失調症のイメージの変化  
7件法で調査、中間を4として、0に近いほど肯定的なイメージ、7に近いほど否定的なイメージである。(平均値で表記)

### 3. 幻聴妄想かるた実施による社会的距離尺度の変化

8項目の質問のうち、「統合失調症の人が同じ地区の町内活動に参加する場合」、「同じ地区に精神障害者の社会復帰施設ができた場合」、「同じ職場で働く場合」、「近所に家を借りて住む場合」については、講義前のアンケートの時点で8割近い者が賛成の考えを持っていた。一方、「家族の誰かが統合失調症の人と交際する場合」、「子どもが統合失調症の人と結婚したいと言った場合」、「自分の家に空き部屋がある場合に貸すかどうか」については、反対の回答が多かった。かるた実施前後で比較すると、「経営者の場合、統合失調症の人を雇うかどうか」において有意な変化が見られたが、その他の項目では大きな変化は見られなかった（表2）。

表2. 幻聴妄想かるた実施前後における賛成と回答した者の割合

質問項目	幻聴妄想かるた実施前	幻聴妄想かるた実施後
統合失調症の人が同じ地区の町内活動に参加する場合	65名 (87.8%)	67名 (90.5%)
同じ地区に精神障害者の社会復帰施設ができた場合	60名 (81.0%)	63名 (85.1%)
同じ職場で働く場合	59名 (79.7%)	62名 (83.8%)
近所に家を借りて住む場合	57名 (77.0%)	52名 (70.2%)
経営者の場合、統合失調症の人を雇うかどうか	35名 (47.2%)	43名 (58.1%)
家族の誰かが統合失調症の人と交際する場合	22名 (29.7%)	24名 (32.8%)
子どもが統合失調症の人と結婚したいと言った場合	21名 (28.3%)	21名 (28.3%)
自分の家に空き部屋がある場合に貸すかどうか	18名 (24.3%)	19名 (25.7%)

社会的距離尺度を主因子法、バリマックス回転による因子分析を実施したところ、2因子が抽出された。第1因子は、「統合失調症の人が同じ地区の町内活動に参加する場合」、「同じ地区に精神障害者の社会復帰施設ができた場合」、「近所に家を借りて住む場合」、「同じ職場で働く場合」、「経営者の場合、統合失調症の人を雇うかどうか」の項目で、「社会生活における統合失調症者との関わり」と命名した。第2因子は、「子どもが統合失調症の人と結婚したいといった場合」、「家族の誰かが統合失調症の人と交際する場合」、「自分の家に空き部屋がある場合に貸すかどうか」であり、「私生活内での統合失調症者との関わり」と命名した。これら2因子間における幻聴妄想かるた実施前後の比較をしたが、有意差は認められなかった。

### 4. 自由記載の回答

自由記載の回答は、62件の回答があった。自由記載の内容を、授業効果に関する部分を中心に精読し、意味内容を検討した結果、「症状の理解」、「個性の理解」、「イメージの変化」、「かるたを通して学ぶことの楽しさ」の4カテゴリーが抽出された。（表3）

表3. 幻聴妄想かるたによる授業効果（自由記載の回答）

カテゴリー	自由記載の内容（抜粋）
症状の理解	<p>幻覚妄想がある人たちにとっては、今日のかるたが本当にある出来事なんだなと思った。かるたをすることによって、統合失調症の症状を知ることができた。</p> <p>絵が特徴的で、精神障害者の人がどのように見えたり聞こえたりするのかが分かった。</p> <p>妄想かるたをして、かるたができた背景をDVDで見て、精神疾患を持つ人々にとって、かるたに書かれていることは全て真実なんだということが分かりました。</p>
個別性の理解	<p>個人個人、特徴を持った幻覚をもっていることが分かりました。</p> <p>人それぞれ十人十色の妄想があるのだと思った。私たちの想像では到底思いつかない妄想が数多くあるのだと感じた。</p> <p>感受性豊かだと思った。</p> <p>どの人も色々な個性があり、その人の素晴らしさが引き出されていて、絵や言葉から想像することができました。</p>
イメージの変化	<p>精神障害者はどこか怖いイメージがあったが、このかるたをしたり、作ったときの事を見るとそうではないことが分かりました。</p> <p>怖いイメージがありましたが無くなりました。色々な考えがあるんだなと思いました。前までは怖いと思ったけど、授業を受けてそんなことないかなと思うようになった。</p> <p>妄想の内容は怖いものもあったけど、作っている人の様子を見て怖いイメージを持つことがなかった。</p> <p>ビデオを見た後もイメージが変わることもあった。みんな明るくて生き生きしているひともいたのが目に付いた。</p> <p>統合失調症の患者さんは、明るい人もいたり、私達と一見変わらないのではと思いました。もっと暗いようなイメージであったが、DVDを見ると明るくてすごく元気な感じであり、普通の人とあまり変わらないようであり驚いた。</p> <p>かるたの内容が怖かったし、別の世界に吸い込まれそうなイメージがした。</p>
かるたを通して学ぶことの楽しさ	<p>普段、妄想を聞く機会はなかなかないけど、かるたという触れやすい形で関わることができて楽しくすることができた。</p> <p>かるたで症状が理解できるので分かりやすかったし楽しかったです。</p> <p>単純にかるたを楽しみつつ、精神疾患について学ぶことができるので、とても良いなと思いました。</p> <p>楽しかったのでもいい体験ができたと思いました。こんな機会をもっとほしいです。</p> <p>このような遊びを通して、みんなに統合失調症のことを知ってもらえればいいと思いました。</p> <p>内容が何を表しているのか分からないものもありましたが、興味を持って取り組みました。</p> <p>かるたは楽しかった。</p> <p>いつもと違う感じで楽しかったです。</p> <p>楽しんで遊べるが、とても深いものを感じました。</p>

「症状の理解」では、かるたを通して統合失調症の症状を理解できたという内容の回答が見られ、「個別性の理解」では、幻聴妄想の症状は人により様々であり、個別性があるという内容の回答が見られた。「イメージの変化」では、精神障害者は怖いというイメージが、かるたを通して肯定的に変化したという回答が多く見られた。一方、かるたの内容が怖いというマイナスイメージが強くなったと思われる回答も一件あった。「かるたを通して学ぶことの楽しさ」では、普段とは違う授業内容や遊びを通して学ぶという内容に肯定的な意見が見られた。

## V 考察

### 1. 統合失調症のイメージの変化

精神疾患を持った人と関わった経験による統合失調症のイメージでは、「予測できないー予測できる」の項目に関して、精神疾患を持った人と関わった経験のある者の方が否定的なイメージを持っていた。学生が精神障害者に抱くイメージは、自身の生活や実際の精神障害者との関わりな



ど限られた体験による影響が大きい<sup>7)</sup>、関わりには否定的な関わりもあり、肯定的なイメージにすべて繋がるわけではないと考えられた。星越<sup>11)</sup>は精神疾患の知識や障害者との接触体験が豊富になれば、好意的で受容的な態度変容がもたらされるとは必ずしも言えないと述べており、精神障害者との関わりの有無ではなく、関わりの内容が重要であると考えられた。

幻聴妄想かるたを実施してのイメージ変化では、18項目で有意な変化が見られている。特に「はげしいーおだやかな」、「危険なー安全な」、「陰気なー陽気な」、「迷惑なー迷惑でない」、「こわいーこわくない」の項目の変化を見ると、いずれも変化が大きく、幻聴妄想かるたを使用することにより、統合失調症の人は怖いというイメージが改められていた。柴らは<sup>12)</sup>、講義で精神を病む人に対する捉え方について学んでいても、危険性や恐ろしさは容易には軽減しないと述べているが、本研究では講義においても幻聴妄想かるたを使用することで、イメージが肯定的に変化する効果が得られた。これは幻聴妄想かるたが、当事者が書いた絵や文章で作成されており、見ている面白いものが多く、明るい内容のものもあったこと、さらに楽しみながら学ぶというその時の雰囲気からも受け入れやすかったことが考えられ、幻聴妄想かるたを教材として使用した効果が伺えた。またかるたの実施に加え、かるたに付属してあるDVDを視聴することにより、作成過程や実際にかるたを作った人の様子を見ることができ、より理解が深まりイメージの変化が強化されたと考えられた。

統合失調症のイメージが肯定的な方向に変化した一方で、表1を見るとその平均は中心である「どちらともいえない」から、やや否定的なイメージにかけて位置しており、講義の段階で正しい知識を獲得し、さらにイメージを変化させるような授業内容が課題として示された。

## 2. 教育内容の検討

小坂らの精神障害者観に関する研究<sup>4)</sup>では、学生の精神障害者観は得る情報によって肯定的にも否定的にもなることが示されており、講義の段階で肯定的なイメージを持てるような教育内容を検討することで、講義から翌年度の実習にかけてスムーズに展開できると考えられた。結果からは、幻聴妄想かるたを使用することで学生の統合失調症のイメージ変化を得ることができ、効果を明らかにすることができた。自由記載の内容からも「かるたを通して学ぶことの楽しさ」が抽出されており、かるたという遊びを通して、統合失調症患者の症状を身近に感じることができ、教材としての有効性が示された。村井ら<sup>7)</sup>は、精神障害者の症状や日常生活には個別性があることを学生が実感できるように指導する必要があることを述べているが、自由記載からは「個別性の理解」に関する記述も見られ、幻聴妄想かるたを使用することにより、画一的な症状という視点ではなく、個別性を意識した視点に気づききっかけにもなったと思われる。一方で、少数ではあるが幻聴妄想かるたを通して、怖いというイメージがついた学生もいた。これは、幻聴妄想かるたを通して患者の心理や症状を理解できたからとも捉えられる。この点については、かるた実施後に個別対応をし、怖いという背景を傾聴しながら、統合失調症の理解を支援していく必要がある。

社会的距離尺度の変化では、幻聴妄想かるた実施による変化はあまり見られなかった。社会的距離尺度は、「統合失調症の人が同じ地区の町内活動に参加する場合」や「家族の誰かが統合失調症の人と交際する場合」など、自身が統合失調症の人と関わる場面を想定した質問である。山下

ら<sup>13)</sup>は、精神障害者に対する深奥性の認知を指摘し、社会的態度の変容の難しさを述べている。本研究においても社会的距離尺度の質問は、統合失調症のイメージよりもより踏み込んだ質問であり、幻聴妄想かるたの実施だけでは限界があったと思われる。結果を見ると、町内活動や社会復帰施設など、「社会生活における統合失調症者との関わり」は、かるたの実施前から賛成と答える者の割合が高かったが、交際や結婚など、「私生活内での統合失調症者との関わり」は、賛成と答える者の割合は実施前後ともに3割程度であった。精神障害者に抱くイメージは、自分も含めた健常者という比較の対象で見やすいことから<sup>7)</sup>、比較ではなく多様性理解の視点からの教育内容が求められる。授業内において、模擬患者を用いたシミュレーション教育<sup>13)</sup>や、実際に社会復帰をした方の話を聞く機会を用意するなど、より統合失調症を身近に感じられる内容の検討が必要であると考えられた。

## VI おわりに

幻聴妄想かるたを使用することで、統合失調症のイメージが肯定的に変化する効果を得ることができた。イメージの変化は、翌年度の精神看護学実習を履修する上においても有効であると考えられた。また、かるたは誰もがやり方を知っており、教材として導入しやすく、遊びを通して学ぶという点も学生は受け入れやすかった。一方で、イメージの変化の程度や社会的距離尺度の変化については課題が残った。本研究は、精神看護援助論の授業の一コマに幻聴妄想かるたを用いて変化を調査したが、授業は幻聴妄想かるた一コマだけではなく、様々なものが組み合わせられて展開している。学生はそれらを通して総合的に変化していくため、結果の解釈には慎重を期する必要がある。今後は授業内容の再検討に加え、実習におけるイメージの変化も調査し、教育内容を検討していく必要がある。

### 【引用文献】

- 1) 厚生労働省編：平成26年患者調査，厚生労働統計協会，2016.
- 2) 山中まりあ，森永康子，古川善也著：精神障害者に対する偏見の研究—認知・感情・社会的距離に着目して—，広島大学心理学研究，17，25-34，2017.
- 3) 伊礼優，鈴木啓子，平上久美子著：精神看護実習における精神障害者に対する学生の認識の変化—精神障害に関する情報源・精神病イメージ調査・社会的距離尺度を用いて—，名桜大学紀要，18，125-140，2013.
- 4) 小坂やす子，文鐘聲著：精神看護学講義前における学生の精神障がい者観—接触体験別の比較—，太成学院大学紀要，17，139-144，2015.
- 5) 斎藤秀光，光永憲香，齋二美子著：看護学生における精神障害者のイメージの変化について，東北大学医学部保健学科紀要，16(2)，105-113，2007.
- 6) 安藤満代，川野雅資，谷多江子著：精神看護学実習を通じた精神障害者に対する対人違和感とイメージの変化，インターナショナルナーシングケアリサーチ，12(2)，115-124，2013.
- 7) 村井里依子，松崎緑，岩崎みずず，小林美子著：学生が実習前後に抱く精神障害者のイメージ—精神看護実習前後の比較を通して—，長野県看護大学紀要，4，41-49，2002.
- 8) 太田友子，廣瀬春次，水津達郎，中村仁志，井上真奈美著：精神看護学実習前後における看護大学生が精神科看護に対して抱く思いに関する分析，山口県立大学学術情報，5，1-10，2012.

幻聴妄想かるたを用いた統合失調症のイメージ調査

- 9) 小坂やす子, 文鐘聲著: 精神看護学実習前後における看護学生の精神障がい者に対するイメージの変化, 太成学院大学紀要, 13, 195-201, 2011.
- 10) 風間眞理, 中谷千尋, 杉山由香里著: 看護学生が持つ精神障害者に対する「スティグマ」, 目白大学健康科学研究, 2, 55-64, 2009.
- 11) 星越活彦著: 精神障害者に対する看護学生の社会的態度, 臨床精神医学, 34(3), 357-363, 2005.
- 12) 柴裕子, 瀧井ヒロミ著: 精神看護学実習前の看護学生の精神を病む人に対するイメージ—社会的スキルおよび信頼感との関係—, 中京学院大学看護学部紀要, 3(1), 51-58, 2013.
- 13) 山下真裕子, 藪田歩, 伊関敏男著: シミュレーション教育における精神障がい者のイメージへの影響—本学の精神看護学教育における新たな取り組み—, 神奈川県立保健福祉大学誌, 13(1), 71-81, 2016.

(資料1)

統合失調症のイメージに関する調査

①本アンケートは1月6日と来年度の実習終了後にも実施予定です。計3回アンケートをし、個々の変化を調査します。氏名の記載は必要ありませんが、同じ回答者であるかを判別するために、**4桁以上の数字(生年月日や好きな数字)、記号、マーク、絵などいずれかを書いてください。**3枚とも同じものを書いてください

②性別を教えてください 女性 男性

③これまでに精神疾患を持った人と関わった経験はどれくらいありますか。

とてもある 少しある あまりない まったくない

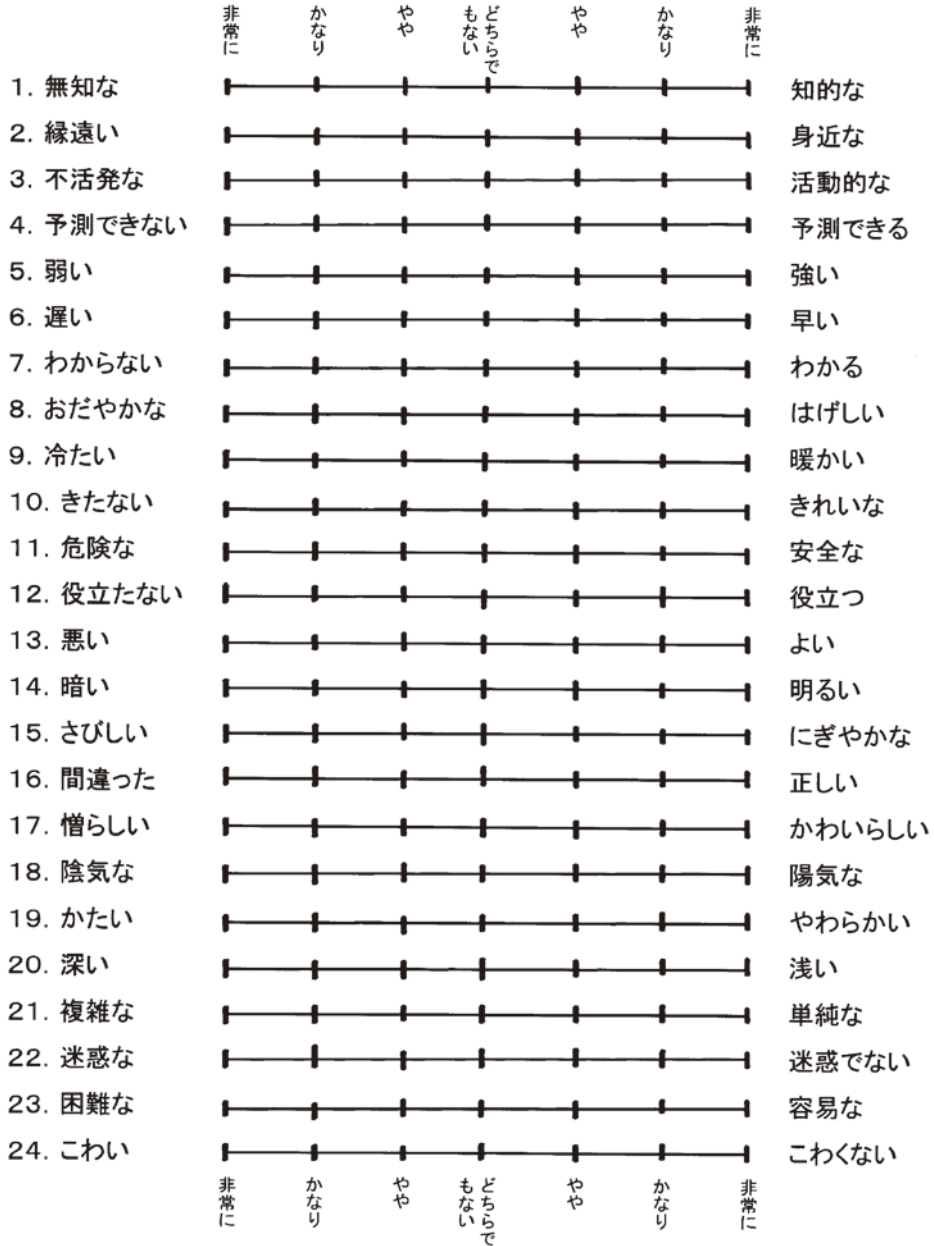
事例Aさんに関して、あなたのお気持ちを教えてください。

Aさん。統合失調症患者。精神科に入院歴があり、退院後は外来で主治医の指導を受け、社会復帰をしようとしている。以下の質問について、当てはまるものに丸を付けてください

1. あなたと同じ地区に精神障害者の社会復帰施設ができるとしたらどうしますか？  
賛成する ・ どちらかといえば賛成 ・ どちらかといえば反対 ・ 反対する
2. あなたが経営者で人を雇うとしたら、Aさんを雇ってあげますか？  
雇う ・ どちらかといえば雇う ・ どちらかといえば雇わない ・ 雇わない
3. Aさんがあなたと同じ地区の町内活動に参加するとしたらどうしますか？  
賛成する ・ どちらかといえば賛成 ・ どちらかといえば反対 ・ 反対する
4. あなたの家に空き部屋があるとしたら、Aさんに貸してあげますか？  
貸す ・ どちらかといえば貸す ・ どちらかといえば貸さない ・ 貸さない
5. あなたの子どもがAさんと結婚したいと言ったらどうしますか？  
賛成する ・ どちらかといえば賛成 ・ どちらかといえば反対 ・ 反対する
6. あなたはAさんと職場が同じだとしたら、楽しく働くことができますか？  
できる ・ どちらかといえばできる ・ どちらかといえばできない ・ できない
7. あなたの家族の誰かがAさんと交際するとしたらどうしますか？  
賛成する ・ どちらかといえば賛成 ・ どちらかといえば反対 ・ 反対する
8. あなたの家の近所にAさんが家を借りて住むとしたらどうしますか？  
賛成する ・ どちらかといえば賛成 ・ どちらかといえば反対 ・ 反対する

統合失調症のイメージに関する調査

統合失調症という病気に、あなたはどんな印象を持っていますか。  
左右に反対の言葉をそれぞれ7段階に分けてあります。各項目ごとに自分の考えに一番近いところに丸を付けてください。今思っている印象で答えてください。



今日の妄想かるたを通しての感想や学び、精神障害者、統合失調症のイメージについて思うことなど自由に書いてください。

